

サロン2002 公開シンポジウム2003

『2002年を越えて ～地域で育てるこれからのスポーツ環境～』

■日 時 2003年8月2日(土) 13:30～17:30

■会 場 東京体育館第1研修室

■時程・演者

司会進行・・・鈴木 崇正

13:30～ 開会挨拶・・・サロン2002代表 中塚 義実

13:40～ 発表 (各35分)

『リーグ戦で育てる地域クラブ
～DUOリーグから東京都ユースリーグまで～』

中塚 義実 (筑波大学附属高校)

『アヤックスとアムステルダムの幸福な関係』

宇都宮 徹壺 (写真家、ノンフィクションライター)

『Jリーグ・アカデミーのねらいとその活動』

山下 則之 (Jリーグ・アカデミー)

15:40～ 休憩

15:50～ 質疑応答・ディスカッション

開会挨拶 なぜ「地域で育てる」がテーマなのか

司会：今年が3回目の公開シンポジウムとなりました。今回は3人のパネラーの方にお話をいただきまして、その後に皆さんを交えたディスカッションを行いたいと思います。まずはサロン2002の代表の中塚さんからご挨拶いただきたいと思います。

中塚：ご紹介いただきましたサロン2002代表の中塚と申します。サロン2002では毎年8月に公開シンポジウムを行ってきました。2001年度はワールドカップのプレ大会であったコンフェデレーションズカップの成果と課題をどのようにワールドカップにつなげていくかをテーマとしました。昨年の2002年度はワールドカップを総括して、ワールドカップは運営面で、市民レベルでどうだったのかということを通じて、東京と神戸で行いました。2002年が終わってしまいました。しかし、我々の団体名は「サロン2002」です。2002年というメモリアルイヤーを踏まえて、ワールドカップ後、どうするかを大きな関心として持っていたと思います。ところで、2002年のワールドカップを振り返ってみると、最初から分かっていたことですが、やはり「早すぎた」と感じます。まず、これまでのワールドカップは、サッカー、あるいはスポーツが文化として定着している国で行われていたわけですが、わが国ではまだサッカー・スポーツの地位はそこまで高くはない。「体育」は確かに浸透していますが、本来の意味でのスポーツが根付いていない。本来のスポーツ・サッカーがどのようなものであるかを知ってもらう良い機会にはなったと思いますが、いずれにしても早すぎた。ワールドカップはまた、開催地やキャンプ地など、地域が主人公のイベントです。しかし、長い間の中央集権体制に慣れきっていて地域がなかなか自立できていない。もちろんワールドカップを機に地域づくりを考えて町おこしに成功した事例もありますが、本当は日常的な、地域に根ざしたクラブの活動がベースにあって、その延長でワールドカップを開催するというのが本来あるべき姿であった。そういう意味では早すぎたなと思います。次に開催国になる機会がいつかは分かりません。各大陸を一巡すると、一番早くて2026年ぐらいでしょうか。川淵キャプテンは2050年を目標に掲げているようですが、次にも開催国になる時は、スポーツがもっと身近なものでありたいし、地域がもっと自立した存在でありたい。そのためにはまず、地域に根ざしたクラブの育成が鍵になると考えます。そこで今年のシンポジウムのテーマを「地域で育てる」に致しました。会員の方、会員以外の方、色々な分野の方にご来場いただきまして、いろいろなご意見をいただきたいと思っております。今日一日よろしく願いいたします。

『リーグ戦で育てる地域クラブ』

～DUOリーグから東京都ユースリーグまで～

中塚義実（筑波大学附属高校）

「リーグ戦で育てる地域クラブ」というテーマで話をさせていただきます。1996年に東京都内の文京区・豊島区で始めたDUOリーグも8年経過して、2004年度からは東京都全域でリーグ戦を始めることとなりました。リーグを育てながら、色々な可能性が見えてきて、ある程度形になってきたので、実践報告を中心に紹介させていただきます。

1. チームークラブーアソシエーションの違い

はじめに言葉を整理していきたいと思います。スポーツ集団を考えたとき、我々はゲームを行う単位である「チーム」しか見ていないのではないのでしょうか。

「クラブ」とは、年齢・ニーズ・性別など、様々な人で構成されるチームが集まった団体であり、クラブの連合体がアソシエーション（協会または連盟・リーグ）です。

ここで扱う地域に根ざしたクラブ育成は、チームの集合体としてのクラブを育てようということだとお考え下さい。ただクラブ作りの議論を聞くと「クラブの枠組作り」の話ばかりが先行しています。そうではなくリーグ戦という活動を通じて結果としてクラブが育つという事例を紹介したいと思います。

2. ユースリーグ誕生の意義

日本のサッカー史を振り返ったとき、ユースリーグの誕生は、日本リーグ発足、Jリーグ発足に次ぐ日本スポーツ界の大改革であると考えております。

ご存知のように、日本でスポーツが展開してきたのは学校の運動部を通じてでした。そこでは学校が持っていた考え方・文化がベースになり独特なスポーツ観が形成され広まってきました。それは企業運動部にも持ち込まれ、日本独特の考え方として定着し、厳格なアマチュアリズムのもとで企業スポーツも進展してきました。

日本サッカーリーグは、アマチュアとしてトップレベルのスポーツ活動を続けていくための仕組みとして1965年に始められたのですが、結果的に純粋なアマチュアリズムから企業アマ、そしてプロ選手公認へと、企業内スポーツがプロ化へ向かうきっかけとなりました。これは大きな改革です。

1993年誕生のJリーグは、企業スポーツからさらに一步踏み出して、トップのプロが広い底辺に支えられているという、いわゆるクラブスポーツへの第一歩を踏み出しました。

ではユースリーグは何かというと、これは学校スポーツに対するある種の挑戦、または学校スポーツを外に開いていこうとする試みです。言い換えると、学校スポーツからクラブスポーツへ一步踏み出していく試みであると捉えられます。学校文化へ働きかけ、これまでのスポーツ観からこれからのスポーツ観へと、スポーツ観を変えていこうとする試みでもあります。

3. これまでのスポーツからこれからのスポーツへ

では、学校が中心になって育ててきた日本的スポーツ観とはどのようなもので、それをどう変えていけばよいのでしょうか。

チーム単位で勝った負けたを争うだけではなく、クラブを育てていこうということ

す。選ばれた選手だけでなく、自立したプレーヤーを育てていこう。選ばれた人がいれば補欠がいっぱい出てくる、これまではそれが当たり前だったのですが、1つのクラブから複数チームをリーグ戦に出すことで、補欠をなくしていきましょう。PLAY志向のチームも競技志向のチームも認めていこうということです。大会中心の生活から、日常生活に根ざした「平日トレーニング・週末リーグ戦」という日常のサイクルを造っていく仕組み。必然的に大会の形式はトーナメントからリーグになっていきます。さらに、高校3年生や中学3年生の「最後の大会」が終わると“引退”して「OB(オールドボーイ)」になるのではなく、「引退なし」、つまり年齢ごとのリーグが階層的にできていけば生涯続けていくことができるわけです。

また、「単一種目中実施」ではなく、リーグ戦を色々なスポーツに広げていくことで、たとえば春のシーズンはバスケ、秋はサッカーという形で複数の種目をシーズンごとで行うこともできる。リーグ戦の経験の中で、「する」だけのスポーツだったのが、「する」「見る」「語る」「支える」と多様な人材が育ってきます。結果的に学校・企業から地域をベースとした活動になっていくと。

学校が担ってきたわが国のスポーツ観が、次の時代の、これからのスポーツが持つべき考え方にシフトしていこうというのが、スポーツの側から学校の側への働きかけなのです。そのためにはユース年代のプレーヤーとそこに関わっている人たちへのスポーツ教育が欠かせないと思います。私も学校で体育を教えているのですが、スポーツ教育の重要な場として学校体育の使命は大です。

そして、放課後の活動としての学校運動部・地域スポーツクラブのところで「仕組みを変える」ことが、スポーツ観を変えて定着させるのに必要です。仕組みを変えることによって次の担い手が育っていくだろうということです。

4. どのようにリーグを育てていくのか？

ここからは具体的な実践例になっていきます。実践に当たっては、次に挙げる4つの段階を踏むことが大切です。

- 1) 理念とビジョンを明確に
- 2) できることから始めよう
- 3) 同志の輪を広げよう
- 4) 環境への適応と働きかけ

まず一番大切なのは、何のために何を目指して行うのか、「理念とビジョン」をはっきりさせるということです。ただ定期的にゲームが出来るというだけでなく、最終的にどういったものを目指すのかを明らかにしていこうということです。

理念とビジョンがはっきりすれば、「できることから始めよう」。最初は小さくてもいい。準備が万全でなくてもいいから小さく立ち上げて、大きく育てていけばいい。できる範囲で続けていくことが大切です。やっていくうちに良いものは自ずと分かってきます。

それは「同志の輪を広げる」ことに繋がってきます。良い活動には自ずと良い人間が集まってきます。「話せば分かる」もしくは「分かる人と話をする」ことが大切です。分からない人にくら話をしても分かりません。説得するだけの時間と労力が無駄です。分かっている人同士で小さく立ち上げて、そして何年かかけて大きくしていく。そのうち、いいものは分かってもらえるようになります。

そのプロセスで、現状の環境への適応と、そこに対する働きかけが出てきます。

5. DUOリーグのあゆみ

DUOリーグではどうかと言うと、まず「DUOリーグの理念」という書き物をしっかり作り上げました。なぜリーグ戦をするのかといたら、日常生活の中にサッカーを位置付けるため、だから「サッカーの生活化」が最初にきます。リーグ期間がシーズンになります。ノックアウト方式だと負ければ終わりですが、リーグ戦では期間中ずっとサッカーに関わることができる。そして3年間の高校生活にサッカーが無理なく位置付けられる。それがDUOリーグの理念の最初です。

「定期的な試合の場の確保」「レベルに応じた受け皿作り」で同程度の相手と切磋琢磨できる。さらに「ささえる人材の育成」。プレーヤーもラインを引くし互いに審判もします。ピッチを取り巻く様々な人材を育てることが、クラブづくりに繋がっていきます。

DUOリーグの理念とビジョンを明確にして、最初は6クラブから始めました。現在21のクラブが関わっています。1996年からスタートして今日まで約8年間ですが、仲間の輪は着実に広がっています。2004年度からの東京都ユースリーグには202のクラブが仲間になってくれました。

「環境への適応」に関しては、基本的には学校のグラウンドを活用しますから学校の理解を得ることが重要になってきます。その際、学校のグラウンドは学校だけのものではないということや学校の先生に理解してもらうことが必要です。学校の教員には、自分の学校の生徒の活動が最優先で、練習試合で来たチームには場所を貸してあげているという感覚があります。自分の学校がまったく関わらないゲームのために学校のグラウンドを開放するというをよしとはしません。公立も私立も、学校はそのような感覚を持っています。しかし全体を見渡すと、スポーツ施設が1番充実しているのは学校であり、学校の先生に理解していただくことが、限られた施設を有効利用する鍵ではないでしょうか。

あと、学校教育活動には顧問の付添を求めるところがほとんどですが、訳の分からない顧問がつくよりも、スポーツを勉強したOBが付いていった方がサッカー的には遥かにいいと思います。DUOリーグ参加チームには、責任能力ある大人の付き添いを求めており、教員でなくても構いません。教員以外の人材を育て、クラブの人材として定着していくことが大切です。

6. 東京都ユースリーグの歩み

DUOリーグの理念と活動を東京都全域に広げていくことで、東京都ユースリーグを2004年度より本格的にスタートすることになりました。この経緯を簡単に述べると、まず、DUOリーグが東京の文京区・豊島区で起こり、それをどうやって広げていくかをDUOリーグとして考えていたのが最初です。2000年の6月には、東京都サッカー協会の理事会で、東京都にユースリーグを作ることが決まりました。そして、その実行部隊として、高体連の中にユースリーグ検討委員会を作り、そこが中心となって東京都高体連の各地区（都内8地区）でプレリーグを開始したのが2002年4月のことです。それをオフィシャル化するために、東京都サッカー協会の中でユースリーグ準備委員会を作り、私が準備委員長となって準備を進め、今年4月に、東京都のすべての加盟チームに集まってもらい説明会を行い、7月には加盟希望クラブが集まって準備会を開きました。

「同志の輪」は、高体連の研究会やサロンの会合など、様々な団体で仲間と語り合う場を持ちながら理念とビジョンを共有することができたというのが、この東京都ユースリーグを準備する上で良かったと思っています。

「環境への適応と働きかけ」は、オフィシャル化に伴って色々あります。今まではあくまでもプレリーグで、練習試合の組織化でしかなかったわけですが、今度はFIFAからJFAの流れを汲むオフィシャルリーグになっていくわけで、そうすると「サッカーの世界」にユース

リーグがどう適応していくかというのが1つの課題となります。

まずは登録制度。現行の協会登録は「チーム単位の年間登録」です。高体連では1校1チームとしているので、たとえば筑波大学附属高校に100人部員がいたとしても、協会と高体連のルールの中では100人で1チーム。大多数は補欠ということになってしまいます。100人を4つのチームに分けて、それぞれが登録できるような制度を考えなくてはなりません。東京都ユースリーグではサッカー協会のルールと少し違い、チームとクラブの概念を整理しました。加盟するのは「クラブ」、そして「クラブ」はある一定の参加条件を満たす「チーム」で編成される形にしています。条件を満たせば何チーム編成しても構いません。これが軌道に乗れば、こうした考えをサッカー協会の登録制度の見直しに活かせるのではないかと。今、サッカー協会でも「クラブ申請制度」というのが2002年度から始まって、たとえば中・高のチームを持っているところが、関連組織であると認められた場合、クラブとして申請できるようになりましたが、それをさらに進めた制度をこちらでは考えております。

実は筑波大学附属高校は、DUOリーグの初年度は人数が多かったため、3年生中心の「筑波A」と1・2年生中心の「筑波B」の2チーム体制で参加していました。リーグ戦はこの2チームで参加していました。1番盛り上がるのはAとBのダービーマッチです。そして、高体連主催の大会はAとBの連合軍が「学校ナショナルチーム」を編成して公式戦に参加していました。

つまりリーグは日常の場であり、カップ戦は、たとえば学校体育の大会であれば「学校ナショナルチーム」で戦うといったように、使い分けが出来れば、この問題はクリアしていくのではないのでしょうか。年度単位の加盟はクラブ単位で、大会ごとの参加はチーム単位でという形で整理していこうと考えています。

このほかにも、降格・昇格といったところでシビアな問題が出てくるので、そのルール化をしっかりとってはいけない。日本のユースサッカーにも100年の歴史があるわけで、既存の競技会（高校選手権やインター杯など）と並行してやっていくためのスケジュールの調整が1つのポイントになってきます。

オフィシャルな「サッカーの世界」への適応と働きかけの他に、「学校の世界」への適応と働きかけが不可欠です。DUOリーグの頃からずっと大きな課題として残っていますが、「学校のグラウンドは誰のものか」と「学校の先生がついていなくてはいけないのか」という問題は、より広範囲のリーグになるに伴い、どうクリアしていくのかが課題となってきます。

公立のグラウンドは設置者のものであるとするなら、都立高校のグラウンドは都民のグラウンドであり、平日、生徒が登校してから下校するまで学校に貸しているのだという認識が可能です。週末は授業がないのだから都民に返しなさいという感覚であり、大きな流れとしてはこうした認識が行政の方には出てきています。

学校的な立場では、たとえば日曜日に校庭開放をしているときにガラスを割られたとして、その掃除を誰がするのかと言うと、使った人が掃除をすればいいのですが、校舎内が機械警備になっていて立ち入ることができない場合もあります。すると結局、掃除をするのは月曜日に登校した生徒や教師になってしまう。小さな問題かもしれませんが、そういうところをクリアしていかないと、本当の意味での学校の開放には繋がっていかないのではないかと思います。

7. ユースリーグで何が育つか

ユースリーグを何年もやっていて感じるのは、何と言っても「人」が育つということです。

ゲームを行うのはプレーヤーであって、プレーヤーが育つのはもちろんですが、ゲームには審判が必要です。DUOリーグでは高校生に審判資格を取らせて、お互いに笛を吹くということをやっています。つまりリーグ戦を通して審判が育ちます。あるいはスタッフとして、コー

チだけでなくメディカル面のケアができる人材が育ちます。DUOリーグではトレーナー制度を本年度から始めて、トレーナー派遣のNPOと契約して池袋の専門学校からトレーナーの卵が実習にやってきます。こうして、ささえる人材の活躍の場として機能しています。ここで育つ人材が、実は地域でクラブを育てる時の重要な存在となっていくのです。

「チーム」が育つとは、定期的に試合を行うのですからチームが強くなったり、濃い仲間集団・人間関係が育つということです。これはご理解いただけるでしょう。

「クラブ」が育つというのは、たとえばAチーム、Bチーム、Cチームのように複数チームを抱えるクラブが育ちます。Aチームは東京都の2部リーグにいて、Bチームは3部、Cチームは地区リーグにいたるとなったような時、リーグ期間を通してレベルアップした子は上のチームに移籍するということにもなってきます。また「引退なし」だから、卒業後も皆で集まってチームをつくって活動します。現にいま、DUOリーグのOBが、別の高校の卒業生同士で集まってチームをつくり、大人のリーグに参加しています。第1種のチームを組織して、ユースから大人までプレーできる環境を作り上げていこうということも考えています。これが「FC DUO構想」です。これが実現すると、たとえば高校生のリーグ戦は「FC DUOのユースチームがリーグ戦をやっている」ということになり、リーグ自体が1つのクラブになってくるでしょう。このように、活動することによって色々な形のクラブが育っていくと思います。

8. 東京都ユースリーグのイメージ

2004年度からいよいよ始まる東京都ユースリーグは、図のような構造になっています。DUOリーグは、この中の第2地区リーグになります。一番底辺から始めて8年経ったわけですが、サッカー界全体の動きの中で一応こういうところまでたどり着いたという実践報告をさせていただきました。

最終的にイメージしているのは、底辺は近場で、強いところはより広いエリアで。そしてレベルに応じたリーグがシーズンごとに展開していくようになり、そして色々なスポーツにそれを広げることによって複数種目の「シーズン制」が可能になる。これからはそういったものを目指していきたいと考えています。

9. 筑波大学附属高校サッカー部のケースより

このリーグに参加している筑波大学附属高校は、学校でありながらクラブ化を模索しています。アスリート部門・女子部門・フットサル部門。ニーズごとのカテゴリーができている。しかも、卒業生のチームも作っています。

次に宇都宮さんが欧州のクラブを紹介されますが、実は日本も「引退」をなくせれば「多世代型」のクラブを学校ベースで育てることができる。それにチャレンジしております。

リーグ戦を行うことで「人が育つ」「チームが育つ」「クラブが育つ」そして「スポーツが育つ」となっていけるというところで、私の話を閉めたいと思います。

どうもありがとうございました。

司会：さすがですね。時間ピッタリに終わらせて頂きました。

本日いらっしゃっている方々には、「日本でどうやってクラブを育てていくべきなのか」というイメージをお持ちの方もいらっしゃると思います。いまの中塚さんのお話で、ユース年代を核としたクラブづくりというものに、ひとつの道筋というか方向性が見えたと思います。

『アヤックスとアムステルダムとの幸福な関係』

宇都宮徹彦（写真家、ノンフィクションライター）

先ほど中塚先生のお話で、地域におけるリーグという話がありました。これから私は、ヨーロッパの事例、具体的に申しますとオランダのアヤックスについて、今年4月の現地取材をもとにお話したいと思います。ただ私は、育成の専門家ではありません。あくまで「写真家が見た、欧州のクラブのあり方」というテーマで、私が感じたこと、関心をもったことについてのみ、お話をさせていただきます。

今回の講演のタイトルは「アヤックスとアムステルダムとの幸福な関係」とさせていただきます。アムステルダムという国際都市と、そこを本拠とするメジャークラブのアヤックス。その関係は非常に幸せな関係にあると感じました。

思い出していただきたいのですが、今シーズン（2002-03）のチャンピオンズリーグでのアヤックスの戦いぶりが強く印象に残っている方も多いと思います。ちょうど私は、この取材で準々決勝のアヤックス対ミラン戦を見ることができました。

これがその時のメンバーです。あまり名前と顔が一致しないかもしれません。ざっと見たところ、ビッグスターと呼べる選手がいないというのがアヤックスの特徴です。選手の国籍をみても、見事にバラけています。オランダ人はファンデルファートただ1人。後はルーマニア人が2人、フィンランド、チュニジア、アメリカ、南アフリカ、ブラジル、スウェーデン、チェコ、ガーナ……スタメンの選手の国籍は10カ国にも及びます。アヤックスはオランダのチームですが、先発メンバーの中でオランダ人は1人しかいない。

また、2002年のワールドカップにこの中から出ていたのは何人いるか？ これがたったの4人なのですね。チュニジア代表のトラベルシ、アメリカ代表のオブライエン、南ア代表のピーナール。そしてイブラヒモビッチ（スウェーデン）。あまりメジャーな選手がいないというのは、ここからも分かります。

次に選手の年齢を見ますと、ルーマニア代表のキプー（キャプテン）は22歳。ファンデルファートは20歳。非常に若いですね。このときのスタメン11人の平均年齢は23.5歳。で、後半に選手交代がありまして、この中で唯一95年チャンピオンズリーグ優勝経験のあるリトマネンが投入されます。そしてデ・ヨング、シュナイデルの18歳のコンビも入ってきて、ここで平均年齢が23歳ジャストに下がりました。つまり平均年齢でいえば、五輪代表のようなチームがチャンピオンズリーグを戦い、優勝したミランと互角に戦っていました。ホームで0-0、アウェーでも2-2まで追いついて、アウェーゴール2倍で準決勝に行くのじゃないかというところでロスタイムでゴールを決められて、結局2-3で大会を終えました。

さて、今回のアヤックスが特徴的だったのが、多国籍軍であること、そしてスター選手が不在であることです。ただし選手たちは、アヤックスを経てスター選手になっていく。たとえばキャプテンのキプーはローマに移籍することが決まりましたが、移籍金は25億2千万円。で、アヤックスがクライオワというルーマニアのクラブから彼を買い取った時の金額はというと、これが5億円。アヤックスでの活躍で、キプーの市場価値は5倍に跳ね上がったわけです。よく言われているように、アヤックスは商売上手なクラブだと思います。無名の選手を拾ってきて、育て、メジャーにして、ビッグクラブに売っていく。一方で、チームとしては、若さをアドバンテージに変えて国際舞台を戦い、20歳そこそこで国際経験豊かな選手がどんどん育っていく。そうしたサイクルが、今季は特にうまく機能していたと思います。

それでは具体的にアヤックスがどのような歴史を辿ってきたかを見ていきましょう。アヤックスは1900年、19世紀最後の年に誕生しました。上の写真が設立当時のユニフォームです。今と違って赤と白の縦じまだったんですね。当時はロッテルダムのスパルタが全盛期で、彼らの意向を汲んだデザイン変更がなされて、現在のユニフォームになりました。

1部リーグに昇格したのは1911年。設立から11年もかかったわけですね。さらにタイトルは17年後のカップ戦優勝。アヤックスは最初からビッグクラブであるようなイメージがありますが、初タイトルを取るまでにこれほど時間を要したわけです。で、次の年にリーグ戦で優勝しますが、このときにはかなり強くなっていて、このシーズンは無敗で優勝します。1930年代には5連覇を達成、最初の黄金時代です。しかし戦後、プロ化の波に遅れを取ったアヤックスは、しばらくタイトルの取れない時代が続きます。具体的には1947～57年までリーグ戦で優勝していません。チャンピオンズカップ、いまはチャンピオンズリーグに初出場したのが57年。でも2回戦で敗れています。

そして1964年、あのクライフが17歳でデビュー。それから我々のよく知るアヤックスが形付けられていきます。トータルフットボールの生みの親であるミケルスが監督に就任してからは第2次黄金時代が到来し、71、72、73年のチャンピオンカップで3連覇を達成します。さらにその後もファンバステン、ベルカンプなど様々なタレントを輩出していきます。91年にはファンハールが監督に就任。当時は無名でしたが、95年にはミランを破ってチャンピオンズカップに優勝。この年にアヤックスがトヨタカップで来日しているのでご記憶の方も多いと思います。でも、ちょうどトヨタカップ開催から10日後に「ボスマン判定」が下され、これまで育ててきた選手が軒並みビッグクラブに獲られてしまいました。その後はしばらく低迷期が続き、2002年に国内で2冠を達成するまで、酷い時にはリーグ6位というシーズンもあったわけです。

アヤックスというクラブは、成功もしていれば失敗もしているのです。チームが機能しなかった原因はいくつかあるのですが、これまでのポリシーに反して、中途半端にメジャーな外国人選手を採ってしまったことが大きかったと思います。たとえばブラジル代表であったマルシオ・サントスやデンマーク代表であったミカエル・ラウルドップなどを獲得しましたが、結局彼らはアヤックスの戦術には馴染めず、大した成果も挙げられずにチームを去って行きました。この状況を打破したのが、現監督のロナルト・クーマンです。彼はもう一度アヤックスのユースを見直し、若い選手をどんどん起用することを決意、実行に移します。一方で国外からは、無名ながら、若くて才能があり、アヤックスにフィットする選手を呼び寄せました。それが2002年の2冠に繋がり、次のチャンピオンズリーグに繋がっていったわけです。

それでは次に、アヤックスの育成のシステムとその施設について見ていきましょう。これは「デ・トゥーコムスト」（オランダ語で「未来」の意味）というアヤックスのユース専用のトレーニング施設です（写真1）。あくまで「ユース専用」です。

人工芝を含めてコートは7面あります。ホーム・スタジアムの「アヤックス・アレナ」から5kmほど離れた場所に95年、ちょうどチャンピオンズカップに優勝した年に、1000万ユーロを掛けて完成しました。体育館、クラブのオフィス、カフェなども併設されています。

向かって左が入り口ですね。右がスタンドから見たピッチ。下2枚が、左側が「A2」という18歳以下の試合、右が「E1」と呼ばれる10歳以下のチームです。アヤックスはユースの各年代が細分化されていて、毎週リーグ戦が行われています（写真2）。

ご覧の通り、さすがはアヤックス、立派な施設ですね。でも、オランダでは3部や4部のクラブであっても3面はコートを持っています。オランダという国は、具体的に九州より少し小さいくらいの土地に、人口が1559万人の、人口密度は368人/1平方km。全国平均でいえば、日本よりも土地が限られているわけです。それでもフットボールの施設は大変充実している。

ちなみにアムステルダムでは、ストリートフットボールというものを見ません。なぜなら、皆こういったクラブの施設でサッカーが出来るからです。



写真1 ユース専用施設の「デ・トゥーコムスト」



写真2 アヤックス「E1」の試合風景

次に、どういった人たちが「デ・トゥーコムスト」にやって来るのかを見ていきましょう。これは10歳以下のチームですが、アヤックスは12歳以下の子供に関しては、親は週3回ちゃんと送り迎えをしなくてはならないと義務付けられています。オランダでも共働きの家族が多いですから、かなり負担になるわけですが、それでもお父さんとお母さんが交代で子供を連れてきています。この写真のように、大人たちは熱心に子供たちの試合を観戦しているわけですが、どうやら全員が親御さんではないようです。朝の9時45分から10歳以下の子供の試合があつて、次に18歳以下があつて、それから19歳以下、最後にトップチームの試合があつたのですが、観戦のはしごをしている人が結構いました。つまり1日に5～6試合ぐらい、彼らは見ているわけです。「デ・トゥーコムスト」には、このように充実したカフェもありまして、外はすごく寒いのですが、ハーフタイムになると、彼らはぞろぞろとカフェに入り、暖を取りながらコーヒーを飲み、サッカー談義をするわけです。それでまた試合が始まるぞ、という時間になったら、またぞろぞろと出て行って観戦して、また試合が終わるとカフェに戻ってくる。

その繰り返しでした。本当に彼らはサッカー観戦が大好きなのですね（写真3）。



写真3 「デ・トゥーコムスト」にあるカフェの様子

ここで簡単にアヤックスの育成の哲学について触れておきます。この写真、真中に写っているのがダニー・ブリントです。95年にトヨタカップで来日した当時のキャプテンですね。彼は今年の2月からユースの最高責任者になり、さらにユースチームのトップであるA1の監督も兼任しています。9歳以下の子供の試合も、ちゃんと見にきていました。

アヤックスのユースから育った選手は、ライカールト、クライファート、ファンデルファートなどがありますが、彼らはいずれも、このような育成のピラミッドを上り詰めたエリートです。一番下が「F1」で8歳以下。D1～A1がユース部門です。その間、上手い選手がいれば、飛び級というのもあります。また17歳ぐらいになってくると国外からも選手が入ってきて、競争がさらに厳しくなります。

さて、選手選考にあたってアヤックスには「TIPS」という判断基準があります。

「T」＝テクニック、「I」＝インテリジェンス・判断力、それから「P」＝パーソナリティ・自己表現力、そして最後に「S」＝スピード。これは単純な速さではなく、瞬時にテクニカルで正確なプレーが出来るか、ということです。

ちなみにアヤックスの方針として、子供たちは常に1歳年上の相手と試合を行います。体力で押してくる相手に対してでも、彼らは3-4-3でちゃんとボールをまわして勝ってしまうわけなのです。つまり、体の大きい相手に対していかに戦い、そして勝つかということを、この年代から叩き込まれるわけです。

E1のチームに子供を預けているある父親は、「アヤックスで息子はサッカーを学んでいるだけではなく、人生を学んでいるのだ」と言っていました。たとえば彼の子供は、ヨーロッパの大会でドイツに遠征するわけですが、現地でホームステイをして、そこで異文化を学び、親元を離れて試合をするという経験を、わずか9歳で体験するそうです。

こうしたサッカーのプレー以外の教育についても、アヤックスは確固たる哲学を持っています。アヤックスの監督だったコー・アンドリアンセは、こんな言葉を残しています。

「アマチュア育成組織の目的は、優れたプロ選手を育てることにある。すぐれたプロ選手とは、技術的にも、人間的にも成熟した選手のことである」。

例えば、このオブライエン選手。彼はまだ22歳ですが、非常にしっかりしたインタビューの受け答えをしていて、しかもオランダ語で話していました。アヤックスはこうしたメディア・トレーニングも非常に充実しているということです。このオブライエンは、17歳にカルフォルニ

アからアヤックスに入団したのですが、若い外国人選手を受け入れることについても、アヤックスは心を砕いています。まず、選手の母国語を理解する人をアムステルダムから探してきて、その家庭に選手をホームステイさせています。こうした費用はクラブが負担するそうです。

これは、アヤックスのトップチームの練習を見学する地元市民の写真です。どこかのクラブのように入場料は獲りません（笑）。練習が終わった選手は、皆一様に立ち止まって 20 分ぐらいサインに応じていました（右写真）。こうしたファンサービスの徹底にも驚かされましたが、一方でファンが、オランダの選手、外国の選手、分け隔てなく好意を抱いていることにも、少なからず驚かされました。のちに、地元のあるジャーナリストが、「彼ら若い外国人選手にとってアヤックスというチームそのものがホームタウンなのだよ」と教えてくれました。さすがは国際都市・アムステルダム。こうした異文化への寛容さもまた、アヤックスの強さの一助になっているのだなど、私は強く確信しました。



最後に、ホーム・スタジアムのアヤックス・アレナを見てみましょう。ご存知の通り、ここはスタジアムの下を車が通るといって画期的な構造のスタジアムです。ドーム型の屋根が特徴的ですが、この「屋根がある」というのは非常に重要だと思います。雨だけではなく、オランダ特有の冷たい風も防いでくれます。ただし、この屋根があるお陰で、芝の状態が悪いという難点があるのも事実です。このスタジアムは、観客にとっては非常に快適なスタジアムなのですが、選手にとってはあまり快適とは言えません。「選手のためにスタジアムがあるのか？ 観客のためにスタジアムがあるのか？」——本当は両者のためにあると思うのですが。

以上、アヤックスについて色々とお話させていただきました。アヤックスは、育成とマーケティングが非常に優れているというイメージがありますが、それだけではなく「目に見えない部分での力の入れ方」についても、私たちはもっと見習うべきものがあると思います。まず、当然ながらチームは強くあるべきである——それが、クラブの「ブランド」になるわけです。次に、「伝統・物語を共有する」ということ。これはクラブのミュージアムですが、たとえばクライフやライカールトを知らない世代も、こうした展示を見ることで、彼らがいかに素晴らしい選手であったかを知ることができる。この「伝統・物語を共有する」ということも、クラブのあり方として重要だと思います。

それから「地域の交流」。これはアヤックスのカフェの写真ですが、ここでは未来のスター選手や、往年の名プレーヤーと地元の人達が自然に交流できるようになっています。こうした光景も、日本ではまだまだ考えられないものですね。

「遊び場の提供」——「デ・トゥーコムスト」の人工芝のグラウンドは、地元の子供たちに解放されていました。天然芝のようにメンテナンスが少なく済む、このよう人工芝の施設も、もっと増えてほしいと思います。

最後に「生涯スポーツ」。これはアヤックスのオーバー35 というチームです。アヤックスはユースだけではなく、生涯スポーツにも力を入れていました。さすが「アヤックス」と名の付くだけあって、皆テクニックはありましたが、年甲斐のないむちゃなタックルが繰り返されて、そのたびに救急箱をもったおばちゃんが走り回っていました。

アヤックスというチームについては、テレビや雑誌でかなり情報が入ってきています。でも、実はこういった目に見えないところでも力を入れているクラブであるということ、改めて主張しておきたいと思います。ありがとうございました。

『Jリーグ・アカデミーのねらいとその活動』

山下則之（Jリーグ・アカデミー）

司会：山下氏は、現在Jリーグ・アカデミーでリーダーとして普及・育成を担当されています。古くはトヨタ自動車の頃から育成に関わり、93年にトヨタ自動車から名古屋グランパスに移られてからは技術部門のお仕事にも携われ、2002年2月からJリーグ・アカデミーで活躍しておられます。今日はJリーグ・アカデミーの最新の活動内容を中心にお話し頂きます。

こんにちは。ご紹介いただきました山下です。よろしくお願ひ致します。アカデミーの立ち上げから今実践していることまでを簡単に説明させていただきます。先ほど宇都宮さんのアヤックスのお話がありましたが、アヤックスが選手育成をやっているようなシステムを何年か前からJクラブの一部でもよく似たシステムで進んでいました。しかし、日本の場合はまだプロの歴史が浅いということもあり、その中で子供を育てていくとなると、底辺の拡大（普及）から始めていかななくてはいけないという違いがあります。最終的には今のアヤックスの話のようになっていくと思いますが、今からは、Jリーグが取り組んだ「選手育成プロジェクト」～「Jリーグ・アカデミー」の活動までを説明します。

選手育成プロジェクトはJリーグが10年活動してきて、次の10年をどうするか？「Next 10」というプロジェクトの中で「選手育成」を見直すことになりました、お手元に2002年1月11日に最終報告した報告書を配布しています、サッカーの歴史は簡単に流して行きます（パワーポイントで説明）。日本リーグが1960年、Jリーグの開幕が1993年、2002年ワールドカップの開催。Jリーグの設立の理念も皆さんご存知でしょうが、この3つがJリーグの理念としてあります。規約というもののの中に選手の育成という部分があり、Jリーグのクラブとして「1種・2種・3種・4種」のチームを持つこととなっています。プロジェクトのなかでは、日本サッカーの課題というのでも色々検討してきました。「試合の機会・指導者・施設・資金」こんなところが挙げられて議論をしていったわけですが、先ほど中塚先生のお話にもありましたように、「トーナメントの偏った試合機会」というのが、やはり子供にとって大きな課題として「どうしていくか？」ということも話をしてきました。Jリーグとして1つの大きな活動の転機となったのが、やはり海外、特に欧州が子供達の育成に力を入れ始めた。先ほどの宇都宮さんの話にもありましたアヤックスだけではなく、クラブ独自で、アヤックス・フェイエノールト・バイエルンミュンヘンなど、色々なところが選手育成をしていったのですが、それをもう少しまとめて全体を統一していこうというのが、ここ5年か6年前からそれぞれの国のサッカー協会全体が動き出した。そういうこともあって、Jリーグでも「Jリーグとして」選手の育成ということを考えていきながら、各クラブを動かしていく方法はないかということを探ってきました。もう1つは海外の動向にあるように、過去には、16歳ぐらいからの選手育成は多くありましたが、最近では5、6歳から育成を始めだしたクラブがたくさんあり、特にヨーロッパのクラブを個々に見ていくと、5、6歳からスカウティングをやっているというクラブも出てきています。そういうこともあって、日本ももう少し低年齢期からスポーツを楽しみ、選手育成ができるような環境作りが必要ではないかということを確認しました。先ほどのアヤックスの方針にもありましたように、サッカーだけで終わるのではなくて、色々

な意味で人として、人間的な教育をしていくことも必要であります。

現在の日本サッカーを取り巻く環境は、ワールドカップの開催・totoの開始などがありました。また、芝生グラウンドの増加や地域でのクラブ化。日本サッカー協会の中では選手育成を重視したユース強化育成部会の設置。また、指導者養成制度の充実や幼稚園の全国大会も行われております。

そういった背景を元に、Jリーグとして、選手育成プロジェクトの報告書を基に、2002年2月より「Jリーグ・アカデミー」としての活動が始まりました。

(プロジェクターで説明) この辺のプランも簡単に説明していきます。ちょっとねらいが大きすぎてなかなか試みとしては大変だと思うのですが「一億人で未来を創ろう」国民全体がつながりをもって、色々なスポーツの人々と仲間になって、子供たちを育てていく環境作りを進めていきたい。というのが我々の壮大なスローガンです。

日本サッカーの発展のために世界レベルで通用する選手を育てていく環境を構築する。先ほどのアヤックスなど、色々なクラブや国のやり方を勉強しながら、我々は「日本型の育成システム」を作り上げようとしてスタートしています。ここにありますように単なるサッカーのエリートプログラムではなく、このシステムによって子供たちが多彩な能力を身に付け、将来どのような世界においても人生の成功を得られるようその礎となる環境を作り上げたいと思っております。

その活動の重点は「一貫指導体制」「地域とのネットワークづくり」、先ほどの中塚先生の話にもありました通り地域というものを大切に考えていこうと思っております。また「子供達の人間性や社会性を育む環境づくり」そして「育成に関する調査・研究」このあと時間がありますから、この辺の現状調査のデータがありますので、紹介していきたいと思っております。活動の組織は、まず、Jリーグの事務局にアカデミーの本部があります。アカデミーの本部を支えるアドバイザースタッフとして、6名の方々をお願いしております。また、それぞれのクラブの中に育成センターを設置して、この年代をJリーグ・アカデミーとして育てていきます。たとえばイングランドなどのアカデミーと言うと「タレント養成」という考え方があると思いますが、それとは少し離れた「日本型のアカデミー」にしていこうと思っております。本部の役割と致しまして、日本サッカー協会との調整、育成センターへの資金援助、育成センター間の調査などがあります。それからアドバイザースタッフの方には個々の専門分野から子供達の発育・発達に関する情報を提供し、育成センターへのサポートをしていきます。

各クラブの育成センターの役割は、地域とのネットワーク作りに重点を置きながら、一貫指導体制の充実と子供達の人間性や社会性を育む環境づくりです。

育成センターとしての概念図は幼稚園年代から21歳、サテライトまでの年代を考えています。そしてクラブがあつて地域との協力をしている。ただこの幼稚園・小学校年代では、もっと地域との関係が、育成と言うよりも皆で「楽しむ」というイメージを持っております。それから育成センターの活動費用の補填を受けるにはこのような義務があります。

Jクラブは28クラブあるわけですが、育成センターでは資格基準を作って、その基準に沿って審査し、それを満足するクラブを認定しております。今は8つのクラブが認定されております。その育成方針については日本サッカー協会の「育成憲章～プレーヤーズファースト」に沿ったもので、すべてのプレーヤーにプレーできる機会を提供することやユース年代の育成強化を、長期的視野に基づき、発育発達を考慮した育成など、個人を育てていくことを重視しているクラブを選びました。「普及・育成・強化活動としてこういった活動ができている」「幼稚園から21歳までの活動ができる環境を持っている」「スタッフの数」「コーチの数」などにも基準を設けています。そして「地域の子供達を含めてサポートできること」「トレーニング施設」また「地

域サッカー協会との関係」「協会の活動に協力」しているなど、地域との協力関係・地域指導者との関係や「学校・保護者との関係」などを含めた9つの基準に基づいて審査しています。

Jリーグ10年でこういった9つの項目が整備され、8クラブが認定される成果が現れています。現在は、特に幼稚園年代の育成方法と、地域における指導者とのネットワークの構築を重点的に活動を見直しています。

育成のプログラムですが、このように考えています（プロジェクターで説明）。

各年代において段階を追って進めて行く。2002年、2003年はスポーツ導入期（5～8歳）について進めているわけですが、遊びながら全身の神経を促進することを目的としております。写真をご覧ください。この年代ではサッカーを楽しむこと、そしてサッカー以外のスポーツや文化活動をするにも重点をおいています。そして、各年齢ごと21歳まで、段階的に検証しながら進めていき将来は、Jクラブ本来の目的である「タレント養成」で日本サッカーの発展に寄与するような環境を構築します。Jリーグ・アカデミーの考え方としましては、まず2002年・2003年には5～8歳。そして下から順番に積み上げていく「積み上げ方式」を計画しております。しかし、Jリーグは過去10年、既に上の年齢から、ユース・ジュニアユースを整備してきています。それらには、可能な限りサポートします。特に医・科学的に検証し、修整する必要のある事項は提案します。サッカー以外のことも含めてもう1度全体的に見直そうと考えています。

日本型のアカデミーの活動は、ヨーロッパタイプのように良い選手を集めてきて、その選手だけを育成していこうということではなく、まずは、全ての子供たちに幼児年代から順番に遊びを含めて、スポーツの楽しさを伝えることを、他のスポーツ団体の方たちとも連携を取りながら、体を動かした遊びを考えていこうとしております。それが段々進んでいき、いろいろなスポーツを楽しみながら、最終的にはサッカーで世界的に通用する選手の卵が次々育つことを目的にしています。お手元に色々なパンフレットを用意しております。これが今説明したことをもう少しわかりやすくしたパンフレットになっております。もう一つは「アカデミーだより」です。世界の子供たちの活動を取材し、日本の活動と比べてもらおうということです。また日本サッカー協会においても「キッズプロジェクト」として幼稚園年代の育成に取り組んできております。Jリーグ・アカデミーとも連携を取りながら進めています。

それではアカデミーが現在、子供達にどういった活動を行っているのかということ、スライドにしてありますのでご覧ください。

幼稚園年代の子供において、各育成センターは、ボランティアで各地域の幼稚園を巡回して、遊びを中心にスポーツの活動を行っています。それから色々な幼稚園の子供達の【足底圧】を調査する活動も進めております。こんな幼稚園での活動、それから先ほど中塚さんのDUOリーグのお話がありましたが、もっと下の小学校1・2・3年生のリーグ戦を作ろうとしております。モデル地区としての愛知では、2002年には40チームくらいが参加したリーグ戦が、2003年には300チームくらいが参加するリーグになってきました。地域の登録人数においても、1998年をピークに2000年まで減少してきた中で、テスト的に幼稚園の巡回指導とリーグ戦を行ってきたことをきっかけに、幼稚園・小学校世代において登録が増えてきました。今後こういった幼児期の巡回指導と、幼稚園～小学校低学年でサッカーを選んだ子供に対して、グラスルーツのリーグ戦を都道府県で広げて、全国で補欠ゼロのリーグ戦を定着させる。そしたらJクラブの「タレント養成」は現実のものになると思います。

幼児期から小学校低学年に向けてはリーグ戦を考えて、現在テスト中の足裏圧測定なども全国に広げ、将来どういった環境にしていったら子供たちが生涯スポーツを楽しんでいけるのかを明確にしたい。他に科学的なデータとしては、ボールの重量や大きさを変えたときの足首や膝への影響なども調査しています、どういった形で正しい用具を選んでいくのかも考えて、この年齢で色々なデータをとり、そして大人になるまでのデータを蓄積していきたいと思っております。中塚先生とも話をしているのですが、そういったデータ取りをしていくグループを広げていかなければ、活動が広がっていかないということもあり、今後はJリーグ・アカデミーが日本サッカー協会などに提案していきながら、みんなで子供たちの活動をデータにしていき、将来子供たちがどうやってスポーツを楽しんでいけばいいのかを考えたいと思います。それが最初に言いました「一億人で未来を創ろう」というのにつながっていくと思っております。

この活動はまだ初めて1年半です。10年から20年の先を見据えた活動を考えており、みなさんの協力をいただきながらやっていけたらと思っております。自分はこんな協力をしていけるぞという方がいらっしゃいましたら、この後の議論の中でご意見頂ければと思っております。

司会：どうもありがとうございました。普及や育成は日本サッカー協会・47都道府県の協会などが主要な役割を担っているのだと思いますが、Jリーグでしかできない活動というものもあります。双方がお互いに協力し合っていくことも重要なテーマですね。

ディスカッション

司会： 3人のパネラーのお話しはとても裾野の広いものになり、関心も多岐に渡るものでしたが、時間の許す限りなるべく多くのテーマを取り上げながらディスカッションを進めていきたいと思います。

まず施設に関する質問から始めましょう。

質問者： 学校施設を利用する場合、事故などが起こった場合の責任はどうするのか？
その解決としてどのような方法を取ればいいのでしょうか？

中塚： 今日の参加者に、こうした問題に詳しい内海先生がおられますので、逆に教えていただきたいと思うのですが。まず現状を言いますと、学校施設を当てにしないでいいというのは間違いないことだと思います。公共の施設を借りるには抽選であったり、予定した日に取れなかったりでなかなか難しいですね。学校の施設は、部活動で使用していない時間帯であれば空いています。生徒が下校した後は空いているわけですから、これをどうやって有効利用していくかはクラブ育成・スポーツ振興の柱になると思います。事故が起きた時のことは、貸す側はいつもすぐく気にする訳です。ですから、事故が起こるのが怖いから貸せないというのが非常に多い。

どうしたらいいのかというと、まずは事故がおきないように対応をすることが前提ですね。たとえばゴールにはしっかり杭を打ちましょうと。これはルールにも記載されていることで、例えばゴールの後ろに重りを置いてなくて、子供がゴールにぶら下がってそのままひっくりかえって怪我をしたというようなことがあれば、なぜ杭を打ってなかったのかということによって設置者の責任が問われます。ちゃんと杭も打ってゴールが動かないようにしているのに、そこにぶら下がって怪我をした時は、ぶら下がった者が悪いということになる。するとその場合、設置者よりもそこで活動をしていた管理者・指導者の責任になる。施設を貸す側とすれば、問題が起きないように環境を準備する。それを理解した上で、使用する側は使用するルールをちゃんと守って活動する。この約束事さえ守られていれば本当はスムーズに開放できると思います。どうしてもそれぞれちょっとずつ怖いですから、開放できないということになるのではないのでしょうか。

司会： 日本では施設不足が最大の問題ですし、それを解決することはサッカー人口を増やしていくことにもつながっていくと思います。施設の利用料の観点から論じることはできますか？

中塚： 公共の学校の施設に関してはこれまでは全部無償ですね。もうちょっと正確に言うと私が勤務している国立の学校施設に関しては、土地の価格に応じた使用価格がとられるみたいです。すると文京区の都心のど真ん中にサッカーコート1面を使用するとなるとものすごいお金が掛るわけですね。それこそ5万、10万、それ以上・・・そんなのはとてもじゃないけど払えない。しかもそれは学校にではなく、国庫に入ってしまうから、その場にいる教員にも全然還元されません。これは学校の仕組みが変わらないといけません。ですので、今のところは使用料をいただくという形ではなく、練習試合の組織化という形で届けを出しています。また公共の施設を利用する場合は使用料を払っていますので、リーグとして、またはホームチームが負担するという形に

しています。

質問者：校長先生的な立場から話されているようですが、施設を貸し出すことによって利用料を領収することが出来れば、それを施設の整備に利用することもできると思うのですが、そういったことは可能でしょうか？

中塚：不可能じゃないと思いますが、内海先生いかがでしょうか。

内海：今おっしゃったことはイギリスの学校などが行っています。その代わりイギリスでは学校全体がかなり民営化されています。生徒数に応じて学校の予算が決められるようなこともあり、学校全体が商業化している。校庭だけ有料化することは難しく、学校全体の予算の自由裁量は校長にあるのですけど、そうすると今度は公立の学校教育自体が商業化しなくてはいけなくなってしまう。そういった意味で、イギリスの学校の先生はまた違った危機感をもっている。スポーツの関係で言えば、やはりヨーロッパでも地域との共同利用という形で、昨日はサッカーの授業でA面を使えば次の日はB面といったふうな、日本では考えられないような贅沢な使い方をしてはいますが、それでも週末は地域のクラブに貸し出している。そして体育館などでは、体育館の端っこに地域の人のためのクラブハウスなどを設けている。有料化をしていくということがいいのかどうかは議論をしていかなくてはなりません。「公共の施設とは何か？」とことですね。そういう意味ではJリーグが公共の力を借りてこういうことを進めていることには僕は賛成しているのですけど。プロ野球ではごく一部をのぞいては考えられなかったことに風穴を開けた。学校の有料化ということを書いてしまえば、それはスポーツ施設だけに限られなくなってしまって、学校教育全体にも、そして先生や生徒にも影響が出てきてしまうのではないかと思います。

司会：施設に関しては、施設をどうマネジメントするかといった問題、教育の現場の問題、そしてそれをどう管理するかという役所や行政の責任範囲の問題などが入り混じって、全体をどう方向づけていくかというのは、とても大変で重要な問題です。時間があまりないので、他のテーマにも触れていきたいのですが、山下さんへ質問をいただいています。

「アカデミーに関してトップをどう育成していくかと言うことに関して、もちろんJリーグですからサッカーが中心なのですが、どうやればそれを他のスポーツに広げていけるのか？」

「地域指導者の育成・地域とのネットワーク作りに関してアカデミーでは具体的にどのような活動を行っているのか？」の2つにお答えいただきます。

山下：「一億人で未来を作ろう」という、分かったような分からないようなスローガンですけど、我々の気持ちとして、「人と人とのつながり」、もっとつながりを広げていこう、大人も子供も隣のおじちゃんもつながっていこうというのがあります。私自身も田舎の方の出身なのですが、隣のおじさんに怒られたり、隣の空き地でお兄ちゃんたちと遊んだりしました。そういった環境をもう1度作り直して行けたらなという気持ちを持ちながら、みんなでつながっていきたいと思います。中塚先生からも先ほどお話しがあったように、「する・見る・語る・支える」みんなが支えあうような環境の中で、たまたまサッカーをして世界を目指す子もいるだろうし、野球やバレーなど様々

なスポーツをする子もいる。世界のトップレベルを生み出すという観点から言うと、底辺が非常に広い活動を織り成していかないと、それも実現しないだろうし、そこに行きつく前の段階として、みんなでつながりあい、「大人は子供を見る。子供は大人を尊敬する」という体制作りというのがいいのではないかと思います。

また、色々なスポーツと一緒にやろうということで、サントリーのラグビーとJリーグとが一緒に活動しました。これは一緒に教えている場面です。ラグビーの練習をサッカーの子もやるし、その逆もある。これは日本代表のバレーボールの選手ですが、バレーボールの選手も一緒になって子供と遊ぶ。これはたとえば「サッカーのリフティング」だといってデモンストレーションをしていたときに、日本代表のラグビーの選手が「これがラグビーのリフティングだ」と言って、子供を抱えてボールを投げるようなこともしていました。スポーツの垣根を越えてみんなで見たいと思っています。また先日は、相撲の貴乃花と連絡を取り、サッカーと相撲とが一緒になったらどうなるのだろうというふうなつながりも進めています。色々なスポーツの方と一緒に「スポーツが好きな子」も「スポーツが嫌いな子」も「男の子」も「女の子」もみんなで見たいという気持ちをみんなが持つようになれば、一億人がつながるのじゃないかと思います。これは先の長い話で、これもまた百年構想で、そこに携わった者として毎日それを考えながらやっていかないとできないことだろうと。いま、文部科学省の人たちなども巻き込んで、先ほどお配りしたパンフレットでは、サッカーという言葉あまり使わずに何か書けないかなということで、そういった写真などを使いながら、みんなに仲間になってもらえないかなと狙っています。まあ、あと10年くらいしたら何か見えるのではないかと。今はまだ見えていませんが、さっき言ったようにラグビーの人たちと一緒に子供とスポーツを楽しんだりしています。

指導者の育成に関しましては、Jリーグの各クラブの中にトップチームの監督・コーチもいますし、メンタル担当の方もいるし、色々な部分で地域の指導者の方との勉強会などを通じながらスタートさせていきました。特に小学校・中学校の子供たちを見ていこうという考え方で、中学校へは巡回しながら部活の先生とも連携をとっていこうということも始めました、ライセンスのある・なしではなくてみんなで見たい子供たちを見ていくための勉強会をしましょうということ今年からJリーグの各クラブでは始めてくれています。まだ全部はそういうふうにはなっていませんが、方向性は明確にしております。

質問者：育成センターはどうなっているのですか？

山下： 今、8つの認定した育成センターというのがありますが、その次に4つ、オブザーバーで参加してくれているクラブがあります。Jリーグには28クラブがありまして、ここ2～3年で28クラブすべてが地域と一緒にスポーツを楽しめる環境作り、協力できる体制作りにしたい。28クラブ全てが仲間になれる。1つの県に複数のプロクラブがある。たとえば静岡や神奈川では底辺の子供達に関しては、トップが競争しているのとはまた別に子供たちを見ていこうということも神奈川のクラブでテスト的に進めてもらっています。そしてもうひとつ、47都道府県の中で、Jクラブのあるところのないところがあるわけですが、そういうところに関してもクラブのほうから出かけて行く。子供達にとっては、自分の県にプロクラブがなくても、近隣のJクラブと連携が取れるんだというふうにしていきたいと思っています。

ラグビーとのスポーツ教室も甲府でやっているのですが、他のクラブからも協力に

来ていただいて、ラグビーの選手とバレーボールの選手と、複数のJクラブが集まりました。色々な意味でできる限り子供たちの活動は平等になるように考えています。

司会： Jリーグも年々加盟クラブが増えており、それぞれのクラブと地域の浸透度合いはまちまちであると思います。Jクラブと地域との係わり合いをもう少し見守ろうと思います。

東京都ユースリーグに関して中塚さんに質問です。

「東京都ユースリーグの参加チームの規模はどれくらいなのでしょう？」

また「U-16、U-17といった細分化した学年単位のリーグ編成の構想はありますか？」

「中学生年代のリーグ構想というのはいかかですか？」という質問なのですが。

中塚： まず現在東京都で高体連に加盟している学校が320ぐらい。クラブユース連盟に加盟しているのが14。その中で今回ユースリーグの理念に賛同して加盟すると意思表示したクラブが205あります。伝統高と呼ばれている学校でも顧問がいなくて参加できないといったところも結構ありました。それでも205というクラブが参加してくれて、1つのクラブから複数チームが参加できますからトータルで280チームあまりのリーグになります。これをDUOリーグがやっているように、大体8チーム単位のリーグに分けてやっていきます。1学期と2学期にリーグをやって、3学期はオフシーズンでありプレシーズンであるという1年間の流れを作るためには8というチーム数は都合が良く、1学期間で1回リーグを終えることができます。8チームですと7節です。週末7回ぐらいならなんとかスケジュールを調整してできるチーム数です。

今度については、当然U-18だけでおしまいでなく、その下の年代にも広げていこうと考えています。1年刻みはなかなか難しいと思うのですが、できれば2年刻みぐらいで、次はU-16、その次はU-14という形で中学生年代にも広げていきたいなど。ネックになるのは、たとえばU-16で区切ったときに、高校1年と中学3年です。学校単位ではやっていけません。こうなったときに、リーグ加盟の単位が地域のクラブとして自立していくスタイルになっていくのではと思います。続けて言いますと、サッカー協会の登録も、たとえば2種がU-18といっても、高校在学の選手であれば18歳以上であっても2種に含まれます。つまり留年した子も2種登録をして試合に出られる訳ですけど、ここのところはスポーツのルールとしてどんどんやっていじかないかと。U-18は18歳以下。誕生日がきたら次に行く。U-16リーグでやっても、誕生日が来て17歳になればU-18リーグに押し出されると。こういう形にできないかと考えています。そうすることで、1月から3月までの早生まれの子にチャンスが出てくるのではないかと。早生まれの子が小学校や中学校で日の目を見ない状況にあるということは、サッカーだけではなくて学校教育全体にあるのですが、「誕生日がきたら次のカテゴリー」とすれば、早生まれの子にもチャンスが生まれ、結果的に色々な子にチャンスが生まれるのではないかと。リーグ戦はこのように、学校のルールではなく、純粋にスポーツのルールでいこうと考えています。もちろん学校のルールに従う学校対抗戦も、カップ戦や定期戦という形で残していく。そういうイメージを持っています。

司会： ユースリーグは来年度からということなので、注目して見守っていきたいですね。同様のトライアルが他の種目や地域で行われていくことも期待されます。

質問者： 感想なのですが、リーグ戦やクラブといったことでスポーツ観が変わっていくことが

期待されていると思います。特に女子サッカーの場合、機会や環境が男子に比べて整っていないということもあります。それはトップももちろんユースプレーヤーに関してもそうですが、1つのクラブが複数のチームを持つことは理想であると思います。

中塚： 私が指導している筑波大学附属高校は、恵まれた環境には違いありませんが、昨日まで男子のアスリート部門と女子部門と一緒に合宿に行っていました。その時に聞いたのですが、ある部員は受験雑誌か何かに筑波大附属高校に女子のサッカー部があるというのを聞いて受験してきたということです。サッカーをやりたい女子は高校生年代で少しずつ増えてきているし、高校年代の女子チームも徐々に増えてはいるのですが、各学校に2～3人しかいないのでチームにならないというケースがまだ多いのではないのでしょうか。たとえば今回、近くで合宿していた日本橋高校にも女子部員が2人ほど来ていて、一緒に練習をしました。このように、合同練習や合同チームとして、学校の枠を先に越えていくのは案外女子サッカーの方なのかなと思います。フットサルに関しては、リーグ構想との兼ね合いもあるのですが、リーグ戦の合間の8月と2月に、東京都では2種年代のフットサル大会を企画してまして、11人制のオフの時期にフットサルをしてもらおうというイメージを持っています。高校生年代のフットサル人口も増えてまして、都心部など特に場所がないところではフットサルが可能性があるなと思います。

司会： 宇都宮さんはヨーロッパのサッカーを取材されている中で、女子サッカー事情をどのようにご覧になっていますか？

宇都宮： 女子サッカーは、直接は見えていないのですが、スウェーデンでは、スポーツ新聞やテレビでの女子サッカーの扱いは大きいと感じました。もちろん男子サッカーほど扱いは大きくはないのですが、きちんと放送がされておりました。日本でも今回の女子ワールドカップのプレーオフ・メキシコ戦が取り上げられていましたが、これを一時的なものにするのではなく、これからどう変わっていくかには注目しています。

山下： 女子サッカーのプレー人口を増やそうというのは、日本サッカー協会としても動いていますが、Jリーグ・アカデミーの試みとして、代表のOBをコーチと一緒に幼児の遊びに参加して巡回していただいたのですが、前にやったイベントでは、幼児や小学生に対しては女性のコーチの方が遊びに入りやすいといった感じを受けました。協会としても今後女性のコーチを増やしていきたい、そういった機会を増やしていきたいと思っております。

質問者： 海外の事例や学校教育など複雑な事例が絡み合っていると思うのですが、これだけは絶対言えるのは、日本はまもなく少子化が始まって大変な高齢化社会に入ることです。その時に子供たちのためと言う大義名分で本当にいいのだろうか？お年寄りも使えなくては意味がない。たとえばNPO法人が立ち上がって、学校を利用してシャワーを作る・スポーツ施設を作るとしても、いつかのゴルフ場のように「誰も使わなくなってしまった」となってしまった時にどうするのか？その辺の見極めというのは誰がシンクタンクとして考え、アドバイスをしていくのか？たとえばJリーグなり、日本サッカー協会なりがタイアップして、例えばどんどん都心が空洞化していくとか、空き地が増えるのかという長期的なアドバイスをしてくれるところがあるの

か？医療に携わっている者として、そこら辺は非常に心配です。極論ですが、僕の手持っているイメージとしては、余っているゴルフ場からクラブハウスを持っていくとか、地元で使っていない空き地なりにNPO法人や行政が入って、クラブハウスを作ってJリーグのコーチが行ってその地元にJのチームができるよというふうになれば、親御さんの負担としては、そこに子供を連れて行くだけということになります。まあ、まずは老人ホームでゲートボールができるとかそういうふうな環境をなんとかしなくては、10年経って子供がいなくなっちゃって、せっかく作ったけどここ使えませんね・・・というふうになっちゃうのを非常に危惧しています。学校を利用するのは非常にいいと思うのですが、山間部などではどんどん廃校になっていて「じゃあどうしようか」となって、「別なことをやろうか」というように学校施設をどう利用しようかというのを議論することは多いと思うのですが、そのように大局的な見方をするアドバイザーのスタッフはどのようなことをなさっているのか分かれば教えて下さい。今後日本の財政は豊かになりません。スウェーデンやイギリスにならって福祉を充実していくとか、海外から子供を受け入れるとかを考えなくてはいけないと思うのですが、そういったバリアを取り除くために、アドバイスをしていけるのであれば教えて欲しいですし、もしそういうのがなければ自分たちで考えていくしかないわけで、マスコミなりを利用していかなければいけないと思うのですが、いかがでしょうか？

山下： 今の質問に対して、その方がいいかどうかは、僕がいいと思ってお願いしているのですが、Jリーグ・アカデミーとしてはアドバイザースタッフとして運動生理学や心理学の専門家、そしてスポーツ社会学の方にもお願いしております。今NPOなど日本の社会で起こっていることをアドバイスしていただける方をお呼びしております。リーグに関しては中塚さんをお願いしております。今後さらに増えて行っていたらと思いますし、今年の4月から昨年1年間やってきた実績を元に、\$月からアドバイザースタッフの方に入って頂いて、専門的に考えていこうとしています。先ほどの高齢化していく社会においてアカデミーの活動はどうやっていくのかということも出てきています。ただ、現実的にはそれだけではすまないでしょうし、少子化というのはもっと考えていかななくてははいけません。ただそこで、先ほども言ったように、一億人を仲間にするので、ここにいらっしゃる皆様も、我々アカデミーの仲間として今後もアドバイスをいただければと思っております。特に地域などで地域性もありますし、地域の実態を教えていただけるアドバイザースタッフというのは必要になってくると思いますので、そういう意味では本当にお世話になっていきたいと思っております。よろしく申し上げます。

司会： Jリーグの山下さんとしてはそのようなお考えですが、日本サッカー協会の中でそういった総合的・長期的な視野で、社会とサッカーの関係を分析・評価しているということは聞かないですね。

質問者：Jリーグ・アカデミーに関する話なのですが、シーズン制に関して、たとえば春にバスケットをやって、秋はサッカーをやって、夏は野球といった感じにはなりますか？

山下： 子供たちの間ではテスト的にやってもらっているクラブがありまして、冬はスキーをやってみようというような大まかな感じには出ていますが、どの時期に何をすることまでは考えていないというか、まだできていません。小学校低学年のリーグ

の中で、1st. 2ndステージに分けてやってみようというところがあります。そこにまた違ったスポーツを入れるということは考えていきたいです。

質問者：サッカーに向いている子とかでも、子供の頃って木登りやかっこをやらせればいいのじゃないかという考えもありますし、またサッカーを中心にしながらも、違うスポーツの才能を引き起こすこともできてくるようなれればと思うのですが

山下：今はイベント的に山登りなどもやったりはしていますが、色々なスポーツをイベント的に取り入れて、子供たちにスポーツを経験してもらおうことをしています。シーズン制といったようなきちんとしたシステムにはなっていないので、今後参考にさせていただきます。

司会：長時間の報告・ディスカッション、お疲れさまでした。パネラーや参加者の皆さまから有意義なお話をいくつも聞くことができました。中途半端になった問題もありますので、今日ここで話題になったテーマを引き続き検討していきたいという方はサロン2002代表の中塚さんにぜひご連絡ください。サロン2002の会員にご関心のある方は受付にお申し出ください。今日は本当にありがとうございました。